

遠い昔は灼熱地獄。現在は開発途上の南の島の一城で。

朝一番から、ここ数カ月は同伴生活を強いられた相方少女の PHS が、目覚まし代わりに鳴り響いた。

「もしもし？ おはよーくーちゃん、元気してた？」

その幸せな着信音は、相方ラピの PHS の、待ち受け画像の少年からの伝話とすぐにわかる。

「今？ 大丈夫だよ。お寝坊さんなヒトが近くにいるから、叩き起こすくらい派手にお喋りしたいなあ♪」

まだまだ起きる気のない水華は、意地でも惰眠を決め込む。

伝話相手は唐突な質問をしたようで、ラピが首を傾げていた。

「うん？ うんうん、いるよー。前も話した、去年くらいから私と同じで拾われたお兄さんなんだけど」

その質問の事情はもう一人からと、PHSの向こうで話し手が変わったようだった。

「おはよーつぐみ 鴨ちゃん、久しぶりー♪ みんな元気ー？」
あくまで我関せずと、布団を被り直す水華なのだが。

「つええええっ!!??」

しかしその声はあまりに……無視出来ない程に大きかった。

「ユーオン、そっちにいるのおお!？」

数少ない義理の親戚、彼女らと年代の近い誰かの名前に。

何も関係ないはずの水華が、ようやくそこで目を開ける――

A t l a s v e r . 2 .

—trial adition—

導入短編

たつきみずか
竜牙水華は生まれつき、反省という思考とは縁が無かった。

「ねえ水華。ほんとにこれで良かったのー？」

なのでこの、しきりに現状を省みている瑠璃色の髪の少女——水華の義理の姉の養女で、一つ年上とはいえ義理の姪にあたるラピス・シルファリー、通称ラピのにこやかな追及を、水華はただ鬱陶しそうにする。

「ジパングに帰るの、私だけだろーなって思ってたのになー。

水華が自分から私についてくるなんて、信じられないよ」

これまで少女達がいた『南の島』から、世界地図では中央に位置する『ジパング』という島国に向かう船の上で、海だけを見ながら二人は適当に話す。

「るさいなあ。あたしがジパングに用があっちゃいけないわけ？」

おっとりとした速さで進む中規模の客船で、水華は風の中で、短いスカートと髪をまとめる長い黒リボンをひらひらと揺らし……せつかく巻いてある、二つに分けたポニーテールの毛先が解けないか追うように、長い茜色の髪を、珍しい水色の虹彩と紅い瞳孔の目で見ていた。

「だって水華、あれだけ南の島のこと気に入ってたし」

基本は無愛想な水華とは対照的に、常に適度な笑顔のラピは、肩までの直毛と首の後ろを部分的に長く伸ばす髪を同じように風に乗せ、不思議そうに笑って深い青の目で水華を見る。

「私達を置いてくれたザイさんも、城の他のヒト達も、水華がいなくなるの、凄いな残念そーだったし。クアン君もサエル君もエルルちゃんも、いきなりでビックリしてたよ？」

「そりゃあんたが、ユーオン迎えに行くので帰ります！ っていきなり言い出すからじゃない」

「私は元々、そろそろお暇しなきゃなーって思ってたんだよ。でも水華は、南にずっといたいかなと思ってた」

水華を見下ろす体勢で柵に足をかける、無袖の功夫服のような活動的で身軽な服装のラピに、水華は苦い顔をした。

「別にジパングと南程度の距離なら、いつだって行けるし」

「あはは。すっかり水華も、おとーさん達と一緒に放浪人だねえ」二人の少女は、島としては大きい南の地——十四年前までには鬱蒼と茂る森が大半を占め、ヒトが住める場所は一つの城しか無かったような島で、つい先日まで城の主の厚意で滞在させてもらったのだが、

「それじゃやっぱり、水華もザイさんとクアン君のこと、気に入ったでファイナルアンサー？」

「誰がよ！ アイツらいつかまとめて見返してやるんだから、その日まで首を洗って待ってろっただけよ！」

かつて四天王などと呼ばれ、強い『炎』の力を持った城の主の男と、その甥である同年代の少年に、同じ『炎』の力の主でも歯が立たなかった水華は、ラピを睨むしかない。

この小さな世界——『宝界』には、数々の神秘たる『力』が存在しており。そんな力をあまり使えない人間と、人間の姿をしながら人間ならぬ力を持つ化け物をまとめて『千族』と呼び、その中でも二人が出会ったのは特に強い力を持つ者達だった。

「ムリムリ。だってザイさんは『四天王』でクアン君は次の『守護者』なんでしょ？ ものすごい強い魔族さんと、その魔族さんに対抗出来る天のヒトだって水華が言ったんじゃない」

「それならあたしは魔族であり天のヒトなんだから。どっちも対抗出来るなんてまさにあたしくらいじゃない」

さらりと言う水華は、そうして二つの有名な血統を幼少時から鍛えられ、類稀な聖魔両刀の魔法使いとして既に一人立ちした身上だった。

「それって要するに、水華はどっちの血も中途半端になって、だから対抗し切れないんじゃないの？」

「何ですよ！ アイツらだって半分人間とか、中途半端そのものじゃないのよ！」

数多の化け物の中でも、血統が旧く純度の高い者が『魔族』や『天界人』であり……それらと人間の混血は、数は少ないが、

「その場合かえって意外に強くなつちやうらしいよ？ あまり人間の血が増え過ぎたら逆にダメダメになるけど、ハーフとかクォーターさんくらいなら、その揺らぎが振り幅になるって、

おとーさん達も言ってたなあ」

「知ってるし！ だからズルイってーのよアイツら！」

神秘の王道、魔道を叩き込まれた水華は当然知るだろう知識を、それと知りつつ口にするラピの理由も水華は知っていた。

「あれー。偉いねエ水華、さすが賢い賢いー」

こうして、水華をからかう事を至上としているようなラピを、もう乗せられまいと水華は不服気に睨む。

「クアン君って本当、優しいを絵に描いたみたいなお美少年さんだったよねえ。それなのに芯も強そうで、何か尊敬しちゃうな」

天のヒトってそんな感じなのかな？ と笑うラピに、

「別に生まれは関係ないでしょ。大体アイツ、ザイの甥だし」

「そーかなあ？ 確かにザイさんも、物静かで優しくかったけど、何だか怖い所も持ってるヒトだと思っうな、やっぱり」

『魔族』はヒトから奪う悪、それはわりとよくある認識であり。

しかし『天界人』は存在をあまり知られておらず、代りに近いイメージで知られる『天使』を思えば善なるものと、どうやらラピは考えているらしい。

「あれだけザイに懐いておいてよく言うわよ」

「え？ 私そんなに、ザイさんに懐いてた？」

そこで本気で不思議そうにするラピに、こいつ……と水華は、

両目を少し怪訝そうに細める。

「むしろ逆だけどなあ。ザイさんには甘えちゃ駄目だなーって、ずっと思ってたんだけどな」

「それは知ってる。つか南のヒト全員にそうだったし、あんた」

あははといつも通り笑うラピは、何の屈託も無く、

「だってザイさん、死んだお父さんにそっくりなんだもん」

あえてブレーキをかけていた理由を、あっさり口に出した。

「でもだからこそ、お父さんじゃないってわかってないんだし。大体、ザイさんは水華の獲物だもんね、狙つちやダメだよ」

「意味わかんないし。ヒトのせいにするなっつーの」

ラピの意図は薄々感じつつ、ぴしゃりと否定する水華だった。



竜牙 水火

『ICAROSS』 pierrot

照りつける高熱の恒星
限り無い凶器をかざして

華やかな異国の儀式
裁かれる過去のあやまち

翼を広げて地上に別れを告げた
飛び立つその訳を誰にも言えないままで

だからせめて貴方だけには残したい
日に焼きつくされて消えてしまう前に
だからせめて貴方だけには話したい
気がふれたとされる僕の胸の内をどうか……

翼を広げて地上に別れを告げた
懺悔する訳を誰にも言えないままで

だからせめて貴方だけには残したい
日に焼きつくされて消えてしまう前に
だからせめて貴方だけには話したい
これでもまだ許されない僕の罪をどうか……

だからせめて……

生まれ変わっても重ねていく償いを君に……



水華・竜牙・Q

J・Q・Lucifuge



一しきり水華をからかい満足したのか、ラビは最初のように、これで良かったの？ とまた口にした。

「ユーオン迎えに行くくらい、私一人で大丈夫だよ？ 元々、私の家だってジパングにあるから、後は帰るだけだし」

「知ってるし。あんな危ないの野放しにしたら、あんた一人で止められるわけじゃないでしょーが」

だから付いてってやってんの。と恩着せがましく言う水華に、ラビは一瞬、キョトンとした後……柵から降りてまで、お腹を抱えて笑い出した。

「有り得ない、水華が心配して帰るとか絶対有り得ない！ というか絶対、ユーオンより水華の方が危険度上だしー！」

昨春にラビの養父母に拾われた少年、十四歳のラビからは一ツ年上で兄貴分にあたるユーオンは、基本的には穏やかで平和な笑顔の似合う、淡々とした金色の髪の少年であり、

「そもそもユーオン、水華とは比べ物にならない弱々なのにー」「何言ってるんだか。アイツ弱いのは普段だけで、銀が起きたら下手したらあっさり人死に出るわよ」

しかし時によりその髪は銀色に変わり、無表情で物言わぬ死神……苛烈で破壊行動を厭わない、人格までも変わるかのようなユーオンについては、ユーオンが拾われてから数度しか会っていない水華にもわかる程、実はラビに危機感を持たせていた。「うんうん。鶯ちゃん曰く『花の御所』でも何回か銀色さんになつて暴れちゃったみたいで、ホントに頭が痛いよー」ただしそれは、ユーオンが危険だからというわけではなく……。

「ああもおー、鶴ちゃんと蒼潤君そうじゆんのご両親に、どれだけ謝ればいいんだろ、私。五カ月近く御所に居候なんて信じられない、ユーオンてば」

「何でそんな、あんたが謝る必要あんのよ」

およそ半年前に、養父母の急な出張と同時期に、ラピが水華と共に唐突な旅に出た後、一人で家に残されていたユーオンが、事もあるうにジパング有数の管理階級の居所、『花の御所』に転がり込むとはと。その状況そのものを齒噛みしているらしいラピに、水華は呆れたような視線を向けた。

「私が紹介するって言った時は見向きもしなかったくせにいい。」

何処で鶴ちゃん達と知り合ったのよー、ユーオンのバカあー」

「つか、柵降りなさい、柵」

柵の下段に立っていた先程とは違い、今度は最上段を足場にしゃがみこんでいるようなラピは、

「私だつて御所にお泊りすらしした事ないのにいー。羨ましい、じゃなかった不届き者めえ」

怒ったように言いつつ顔は笑い、頭が痛いと眉をひそめながら、全身ではしゃいでいる事を感じ取っていた水華だった。

それなので、呆れた顔は崩さないまま、淡々と水華はラピに尋ねる。

『花の御所』の奴らつて、元々あんたの知り合いなんだっけ？」

「うん、そーだよー。鶴ちゃんと蒼潤君と、後は蒼潤君の弟の悠夜君が、仲良くしてくれるんだよー」

にこにこ答えるラピは、不思議なものだよえと後に続けた。

「鶴ちゃんと蒼潤君とね、二人の友達のくーちゃんが、みんな私と同じ十四歳なんだ。クアン君、サエル君、エルルちゃんも三つ子で、水華と同じ十三歳でしょ？ 何か面白いね♪」

「偶然年代が揃っただけじゃない」

「それだけじゃなくてね……何か、同じ匂いがするんだよね？」

鶴ちゃん達と、クアン君達と」

そこで不意に、ラピは柵の上にしやがんだまま、笑顔ながらも何処か遠い目をして海を見つめた。

「水華はクアン君達と、仲良くなれて良かったね」

「……」

別にラピは決して、先日まで共に学校にまで通っていた彼らと、打ち解けていないわけではなかったのだが、

「私は何だか、やっぱり住む世界が違うのかなあ。南のお城もそうだけど、花の御所にもしお世話になつても、結局あんまり落ち着かないんだろーな」

この人間の少女は常に何処か、人間ならぬ血を持つ者と自身に一線をひいていることを、南の島の者達との付き合いを通して水華は改めて感じていた。

「つてことは、花の御所の奴らにも猫被つてるわけ？ あんた」

「あははは。水華の前にいる私がホンモノとすれば、それより少しは多分マトモかな」

「逆だし！ クアン君相手のがあんたチャラけてるし！」

常に笑顔で時に濃い毒を吐いていたラピに、マトモの定義など全く興味ない水華すら、反論したくなる事をラピは口にする。

ラピと水華は、ラピが水華の義姉とその連れ合いに拾われた六年前から、義姉の里帰り時に度々顔を合わせる間柄だった。

「あんたが笑いながら、美形以外生きる価値ナシ。とか言う度、ラピってどーいうコ？ って何度アイツらにきかれた事か……」

「本当く、感謝してよね。私がそうしてれば水華すら真っ当に見えたんだねー、クアン君達には」

船にあまり揺れないとはいえ、柵上で今も器用にバランスをとってしゃがみ続けるラピは、家系に伝わる人間向き護身術を幼少から体得しているなど、家系に関する事柄以外では普通の人間というのが、水華の元々の認識だったのだ。

「真っ当でない猫を被るなんて、だから凶々しいっつーの」

「うわあ。水華に褒められちゃった、これから嵐になるよね」

「褒めてないし！ クアン達の前のあんたの方が上等なのは、あたしも同意するわ」

だからこそ、より良いものに化ける猫を被るといふ表現をする水華の評価基準では、真っ当という事に大きな価値は置かれていないわけでもあった。

「失礼なー。アレは私のノーモア真っ当モードなのにい」

「……はっちゃけてただけでしょーが、単に」

「ジパングではポッシブリー真っ当モードですよーだ。私にはそっちの私の方が上等なんでもん」

いずれにせよ、水華の前でそう在るような、明るいながらも危うげな部分を、ラピが遠慮なく見せる相手は限られており。水華の他には、同年代ではユーオンくらいだった。

いつまでも柵から降りようとしないうラピを、苦々しげな顔で水華は見続け、ラピはまだまだ危うげに笑い続ける。

「クアン君達も鶯ちゃん達も、何か自然にいいヒト過ぎてさあ。一度甘えちゃうと私、骨抜きになっちゃういそーだし、向こうは無理してでも甘えさせてくれちゃいそーだし。そーいうのって、お互いのために良くないよね、うん」

「……ジパングの奴らも、あんな感じなわけ？」

自らの欲望に忠実であることを良しとし、気ままに生きている水華にとって、ラピが言うように自然体そのものが優しく在る同年代の子供達は……それが彼らには自然な欲求ともわかり、良しと感じつつ釈然としない、そんな複雑な相手だった。

「あんたがよくPHSで話す奴は、確かにそれっぽいけど」

「……くーちゃんはわかんない。いいヒトなのは、確かだけど」

ふっと、珍しく少しラピの笑顔が蔭る。

「御所のみんなは、クアン君達みたいにそのままいいヒトだよ。でもくーちゃんは……メインはそこじゃない気がするなあ」

その正体が未だ掴めないと当惑顔のラピは、常に目の相手や状況の核心を追求するのが趣味のようなどころがあり、水華にとっては珍しい姿でもあった。

「意味わかんない。あたしはどいつも話しか聞いた事ないし」

これまで何度も、ジパングの友達についてニコニコと水華に語ったラピが、改めて水華に同じような内容を熱く口にする。「みんなホントに、優しい化け物の子供さん達って感じだよ」

基本はただの人間であるラピの周囲には、水華のみならず、水華の義兄姉である養父母も、ジパングに住んでから出会った友人も、何故か人間がいないというのがラピの話だった。

「御所のみんなはいつも着物でね、でも蒼潤君は剣士だから、袖が邪魔って破いちちゃってるんだ。髪の毛が珍しい夕陽色でね、顔はいつもブアイソで、男は無言でみんなを守る！ みたいな雰囲気がかっこいいの。硬派な男の子はかっこいいよね」

「へー」

「剣も凄いよ、剣の修行が命って感じで道場破りとか余裕だよ。水華といっぺん、何処かで闘ってみてくれないかなあ♪」

「へー」

誠意のない返事の水華は、幼少から実は剣を仕込まれているが、現在はおっぱら魔法使いとして興味なさそうにする。

「蒼潤君の従妹が鶯ちゃんで、着物なのに身のこなしが軽くて、でも凜とした落ち着いた貴族さんって感じなんだあ。あんまり愛想売ったりしないし、ジパングでは珍しく髪も短めだったり赤色だったり、目つきも鋭いからきつく見える事もあるけど、可愛いしホントは凄く優しいし、理想的な女の子だよ♪」

「ふーん？」

「その上武術もいけるし、呪術って不思議な魔法も使えるし。内緒だけど、実は銃の使い手で、私にも教えてくれるんだけど全然敵わないよ。大体何でも出来るんだよね、鶯ちゃんって」

「……へー」

ちらりと今度は、ラピを見返す水華だった。

「それだけ聞くと、そいつら化け物って確信出来ないんだけど。剣も銃も一般的だし、呪術も人間だったために使う奴いるし」

何故人間のラピに、彼らが化け物であるとわかるのかときくと、それは至って単純な、しかしわかりやすい理由だった。

「御所のみんなもくーちゃんも、西の大陸出身の私とは言葉が全然違うのに、会ったその日から話せちゃったんだ。それって化け物さん特有の能力らしいね？」

強い化け物——あえて呼称を探せば聖魔というらしい水華や、霊獣やら何やらの種名の義兄姉はともかく、島国ジパングでは中心に位置する京都に、本来は人間の国なのにそうした者達が紛れ込んでいるらしい。

「それに、蒼潤君の弟の悠夜君なんて特に凄いな。見た目は何だか可愛い感じの、いつも袴の小さな子なんだけど、喋ると一番しっかりしてるの。天才って言われるくらい博識で色んな魔法が使えるみたいで、靈感もすごい強いんだって」

「……ふーん」

「何でか私、たまに避けられてる気がしなくもないんだけどさ。ホントは凄く繊細な子みたいだから、何か私、邪悪なオーラが出てるのかも」

「……へえ？」

海に背を向けて柵上に座ったラピを、水華は頬杖をつきながら、無表情でも感心したように見上げた。

「自覚あったんだ、ソレ」

無愛想な顔付きのまま言う水華に、ラピは笑って首を傾げる。

「悠夜君にはそんな、ヘンに接したつもりはないんだけどなあ。鶴ちゃん達と会った頃は、まあ多少私、荒れてただけだねー」
あははと微笑むラピは、実の父を突然亡くした後、父を追って母が自殺したという悲愴な過去がある事を水華は知っており。その後も二年近く養家を転々とさせられたなど、荒れる理由は十分にあった後での、友人達との出会いだった。

「……………」

友人達をひとまとめに呼ぶ時は、主に紅一点の鶴の名を出すラピに、水華は少しだけ眉をひそめる。

「んーで……後一人は？」

「え？」

「PHSの奴のこと。ソイツが一番、最初に会ったんでしょ？」
「そうだけど……くーちゃんはまず御所の人じゃないしなあ。着物も着てないし、ジパングのヒトなのかも実はわからないよ」
あははとラピは、その少年については大した事を知らないのと、友人達を語る際には必ずそこでトーンダウンしていた。

その少年こそが、ジパングで最初にラピに気安い声をかけ、友人など作る気もなかったラピを御所の者達に紹介し、彼らの仲良し組に混ぜ込んだ張本人で……今も度々、PHSで連絡をとる間柄にも関わらず。

ラピのPHSの待ち受け画面は、深型の帽子がよく似合った、明るく優しい笑顔のその少年である事も水華は知っている。
「くーちゃんの事は、若い薬師さんってくらいしか知らないなあ」

無邪気に見えて意外にしっかりしてるんだよと、これまでより幾分落ち着いた様子で、ラピは口にした。

「あ、でもたまに、想像力が暴走しちゃうと凄く面白いんだよ。風が吹けば桶屋——とかでも、お風呂に穴が開くと大変だよ！？ 気付かずに追い炊きして火事になっちゃったらどうしよう！？ ご近所さんに何て謝ろう！？ みたいな、お人好しさんのの」
「……………」

ラピがPHSでその少年と話す時は大概、そうした話題で更に相手を煽る発言——この場合なら、

「ダメだよ、くーちゃん！ お風呂って事は大体は夜だよね、黒焦げ姿でご近所訪問なんて、お隣さんショック死するよ！——ええええっ！？ つまり風が吹いたら僕、焼死体決定！？——そんな無害なやり取りを最も好んでいるらしいラピのことは、水華も何度か隣で聞いてわかっていた。

「……要するに、あんたがたまに突拍子のない事言い出すのは、ソイツのせいなわけね」

「えー？ それどういう意味、水華？」

常時笑顔のはずが、珍しくキョトンとした顔で水華を見下ろすラピの、いつも絶えない明るい笑顔は……まるでそのPHSに映る誰かを写したようだとい前から感じていた水華に、ラピはまだ、不思議そうな眼差しを向けるのだった。

まるで話題を変えるように、京都はいい所だよ！ とラピは、何度目かの口上を笑って口にした。

「私も色々な所に行ったけど、ジパングのまったり感は凄いなあ」
現在ヒトが住むのは、東西二つの大陸に、中央のジパングとその南にある島で、最も文明が進む西の大陸が、護身用の銃を当然のように持ち、近代的な恰好のラピの出身地だった。

「水華と最初に行った東の大陸は、おとーさん達ともそんなに言った事なくて、港町付近のことしかよくわからないけど……
何処の土地も大概、港が一番栄えるって言うから、そうなる東の大陸はホントに未開の地っぽいね」

「つまり……港町すらしよぼかったと言いたいのね、あんた」
あははとラピは、悪びれもなく笑う。

「だから水華が言ってみたみたいに、吸血鬼伝説とか怖がったり、
村人総出で吸血鬼狩りしたり、凄惨な教会があったりするのかな」
「……巻き込まれた方は、たまったもんじゃないけどね」

「電気も港町周囲くらいにしかなさそうだったしね。南の島はその点、最近発展してきた所だから、まだ開発途中なのに西の大陸の都市なみの賑やかさがあるのが凄いね」

人口が最も多く、またそのほとんどが人間である西の大陸は、大陸の東半分に大きな商業都市や大国が集中しており、

「でも西の大陸も少し奥地に行けば、私の所みたいな古い村や、森ばっかりの西半分は魔物さんの巣窟だって言うし。その点、南はもうかなり開発されて、ジパングに至っては、ほとんどの土地が人間の居住地として整備されてるんだよね」

未開の東、先進の西の間に位置するジパングは、独特の文化を持ち、特に服装や建物、言葉が他とは明らかに違うものだった。

水華は何度か、ジパングに行ったことはあるものの、ラピの家以外には京都にわずかに連れて行かれた事がある程度だった。

両親、二人の兄、二人の姉、両親の友人の家族以外、ラピとユーオン以外の知り合いも水華にはほとんどおらず、

「実はねえ。あんたは私達の娘じゃないのよ、水華」

「……は？」

育ての母——半年前までは実の親だと思っていた相手が正体を明かした後から、水華は親を探す名目の旅に出る事にしたが、それまではお金の単位も知らない箱入り娘でもあった。

「よ……よくも今まで育ててくれやがったわね！？」

修行しか教育方法を知らないらしい親の下、育ての母には剣、父には魔道を教えられ、父はともかく母の方針は恐怖政治にも近く、こうしてジパングに向かう船にいる今も、実家には二度と帰るまいと心に誓う状態だった。

ジパングからしか行けない場所に実家のある水華に、水華はまだ実家にいた頃、養父母の里帰りについてきたラピは何度も外に出ようと誘いをかけてきたものだ。

「水華もたまには、おば様達に遊びに連れてってもらえば？
ずっとここに引きこもってるよりさあ——」

「——たつて、オフクロ達は滅多にこつから出ないし——
ラピと旅に出る半年前までは、ほとんど遠出した事の無かった水華の実家——何処にあるとも知れぬ孤高な無人の大陸の中で、唯一存在する有人の小さな城が、水華が育った軟禁の地だった。」

—でも絶対、ここ来るのは京都の近くのゲートを使うのになあ。
おば様達だってお出かけしないわけじゃないんだし、その時に
もつとついていかないの？—

—その度に家事一週間独占の刑とか施行されんのはゴメンよ。
あいつらほんっと、外出一つでも恩着せがましーんだから！—

この世界には至る所に、空間を超え土地を繋ぐワープゲート
という短絡経路が、出口が固定しているもの、固定していない
ものを合わせて無数に存在している。

固定していると確認されたゲートは誰でも自由に使える事が
多いが、固定していないもの、使用するだけでも無力な者には
命の危機があるものなど、様々なゲートが存在する中、水華の
実家近くに繋がるゲートは、特定者が複雑な力を行使しないと
使えないものだった。

—ほんとに、世界地図に無いような場所だもんね、ここつて—
—海に出たって絶対大嵐で、岸に打ち上げられるし……—

そのため水華は、出入りしたい場合は周囲に頼るしかなく、
養父母に連れられて世界中を旅するラピとは対照的に、真性の
世間知らずとして育ったのだが……。

—大丈夫。あんたは頭は悪くないから、すぐに旅慣れるわ—
—魔道など知識の吸収は良く、魔法と剣を既に達人レベルに操り、
—順応性も高い水華を旅に出す事に、育ての両親は不安の様子は
全く見せなかった。

水華が実家を出て、早くも半年以上になるが。

ジパングから船に乗り、東の大陸、南の島、北の島、そして
また南の島と、実に密度の濃い旅を二人はしてきていた。

「いっぱい色んなヒトに会ったねー。また会えるといいね」

「……会わない方がいいって言われた奴もいるでしょーが」

柵の上に立ち上がったラピが、バランスを取りつつ柵の上を
歩き出すのを、嫌そうな目で水華は見上げる。

「……何でだったっけ」

先程から不安定な体勢でいるラピが妙に気になり、何でこんな
嫌なんだっけかと、水華はふと、腕を組んで考え込んだ。

「水華？ どーしたの？」

ラピがそこで足を止め、水華の方を振り返った時。

ちやうどそうして、バランスのとりにくい危うげな体勢を、
ラピがとった時に。

今まで静かそのものだった船が、突然大きく揺れた。

「——げ」

その瞬間に水華は、自身を占めた嫌な予感の正体を思い出す。

「——あ」

全く想定外に揺れていた船に、柵の上という足場をあつさり
失ったラピは——背後に広がる海へふわりと浮き上がるように、

景気の良い水しぶきの音と共に、一瞬で呑み込まれていき。

その姿は……水華には強く、覚えのあるものだった。

何でだったの？ と。

それがその時、同じ光景が訪れる直前に――

水華が口にした問いかけだった。

「ちよつとラピ……………」

一瞬であつさり海中に消えた相方に、ただ水華は茫然とする。

「あんた…………二度までも――！」

これと全く同じ事が、半年前にもあつたのを否応なく思い出し。

わからないよ…………と。

旅に出たばかりの、ジパングから外の世界に出る船に二人が乗った門出で、ラピは儂く笑いながら応える。

―あんたはラピスちゃんを守りなさい、水華―

帰らないと決めた家出同然の旅に水華が出る時、育ての母は何故か、彼女からは義理の孫を同伴するよう水華に申し付けた。

―あのコはとても…………危うい子だと思おうわ―

この海のように深い青の目の義理の孫を、空のように青い目の母は、ただ痛ましげに見つめて。

「何で、そいつらと知り合つたの？」

「――え？」

化け物の血をひくらしき友人達と、基本はただの人間のラピ。単調な海の景色に飽きた水華は、特に深い意味もなく尋ねた。

ラピは柵の上に、海に背を向けて腰掛けながら笑って答える。

「何でなんだろうね。私もずっと、不思議だつたんだ」

「？」

「私ね、初めてジパングに来た頃、アクマって呼ばれてたんだ」
元々首を傾げていた水華は、唐突な話に更に怪訝にラピを見る。

「アクマって何なのかは、よくわからなかったけど」

ラピの髪は、人間であるのにとっても珍しい瑠璃色をしている。

友人達やユーオンのような赤毛や金髪は、珍しくても人間に有り得る色だが、人間の髪に青の色は自然には存在しないため、化け物扱いされるのも無理もない事だった。

「要は、余所者の私が目に障つたんじゃないかなあ」

深い青の目も人間には存在しない色であり、京都ではなく、近隣の子供達とは幼いラピは反りが合わず…………周囲の子供は、言葉も通じないラピをアクマツキだと言って罵った。

「でもクーちゃんも、クーちゃんが会わせてくれたみんなも、私は誰相手にも同じように荒れてたのに、いつの間にか仲良くなってくれた。それがどうしてなのかは、わからないよ」

彼らと友人達の違いとして、ラピと言葉が通じる事は確かに大きかったが。逆にラピはそれで——誰も打ち解ける気などなかった内面を、態度だけでなく言葉でも伝えた点で、むしろより嫌われてもおかしくない状態だったと不思議そうであり。ジパングを後にする船の上で、寂しげに見える顔でラピは、水華に笑いかけながらその思い出を話した。

—ラピちゃん、遊ぼう！ 今日は何の習い事、いつまでなの？—
京都にジパング語を学びに通ったラピに、よく街を歩いている帽子の似合う幼い少年は、朗らかな顔で声をかけてきた。

—……知らない。きつと終わったら、もう暗くなってるよ—
それに対して、色よく答えたことなど当初はほとんどなかったラピは、それでもすれ違えば必ず声をかけてくる少年に、段々理解出来ないモヤモヤを持って余していったらしい。

—何で………いつも、笑ってるの？—

少年とはたまに、同年代の鵜と蒼潤が一緒に街を歩いており、子供にしては一見気難しそうな顔付きの彼らは、しかしラピを見ると何故かいつも、何処となく楽しげだったという。

—このヒト達は……私のこと、何もきかない—
己の事情を話したくなかったラピに、それは……一つの安堵で。

自分が嫌われたのは、自分に問題があったからなのに。
それだけは知っていたと、ラピは水華に笑って伝える。

「鵜ちゃんや蒼潤君はね。あ、何となく気が合いそうだって、そう思えるものはずっとあったよ」

「へえ？」

元々ラピは水華を始め、無愛想か淡々とした相手とよく話す印象は、確かに水華にもあった。

「でもくーちゃんの事は、未だにわかんない。よく伝話するし伝話してくれるけど、用もイミもない話も多いし、何でその時伝話きたんだろって事もよくあるし」

「あー。そんな感じね、確かに」

ラピが持つPHSは、遠出の仕事に出がちの養父母とラピが、有事の際に連絡をとるため渡されたものであり、用事や理由がない時にそれで話す事を、初めはラピは戸惑ったらしい。

水華もあまり、理由のない事はしない方であるため、ラピの戸惑いの話はわからなくはないが、

「でもそれ、わかんないって首傾げる程のこと？」

珍しく常なる笑顔を薄れさせ、深く考え込むようだったラピにその違和感を伝えた……次の場面だった。

「……くーちゃんはどうして、私に笑ってくれるのかなって。

私は……ホントはみんなと、一緒にいられる資格はないのに」

「——は？」

困ったようにラピが笑った瞬間、前触れもなく、穏やかだった船が突然大きく揺れて。

あれれと呟くと同時に……ラピは背中から海に落ちていった。

そんな光景をまじまじと思い起こしながら。

半年前と同じように海に消えた相手について、水華はぐうと、悩ましげに両腕を組みながら考え込んだ。

「さすがに……有り得くない？」

前回は嫌々、助けるために水華もすぐに海に飛び込んだ。

しかし思いの外手間取ったため、船は遠くに行ってしまう、ジパング近海の孤島に何とかラピを連れて辿り着いたが。

「……あれをもう一度、あたしにやれっつーの？」

そしてその後、水華は意識のないラピを孤島に置いて旅立つ。

水華は元々、決断は早い方だ。

考えるより先に動く事もままたり、それなのに今はこうして、

呑気に甲板に立ったままというのは……。

「悪いけど……付き合い切れないわよ、さすがに」

あまりにあっさり、通常は考え難い決断を下した水華であり、

「あたしの邪魔をするならついてくるなつて、前も言ったよね」

要するに、海に消えていった相手を助ける気は、今の水華にはないという事であり。

ラピを守れど、育ての母の言葉も当然覚えているが。

それとこれとは話が別と、くるりと踵を返し……なかつた事かのようにして、場を後にした水華だった。

船室に戻る扉を開けた直後、何か水華の顔へ飛びついた。

「みぎやああ！　ぎやあああどいて離れて、あっち行ってー！」

「——ポピ？　ダメだよー、戻っておいでー」

まるで猫の頭だけの生き物……頭から長い尻尾と、短い手足の生える珍獣が、尻尾で器用に水華の顔に張り付いている状態に

……奇跡の幻を呼ぶという珍獣の飼い主が、あははと笑う。

「早く取ってこれー！！　あたしにこいつ近付けるなー！！」

「はいはい、ホントに水華はポピが怖いんだねえ」

普段は冷静な水華が慌てふためく様を、心から可笑しげに……珍獣を模したような小さなペンダントを身につける飼い主が、

べりつと水華から珍獣を引き剥がした。

「どーしたの、水華？　今まで一人で甲板にいたの？」

その飼い主とは、紛れもなく……

先程水華の目前で、海に落ちていったはずのラピに他ならず。

「また私の事置いて、途中で船から降りちゃったのかと思った。

船長さんとか心配するから、今度はそんなのダメだからね！」

「……また？」

「去年、一緒に旅に出た時。私だけ東の大陸行きの船に置いて

忽然と消えちゃったじゃない、水華」

いつもの笑顔ではなく、心配と不服の入り混じった顔で水華を見るラピの肩で、水華の嫌いな珍獣が偉そうに座しており。

その珍獣の存在と、胸元の笛らしきペンダントに、ようやく水華はある真相を確信した。

「じゃ……あの時も、ニセモノ？」

「？ あの時、ニセモノって何？」

確かにそこでも、彼女の身近に珍獣と笛はなかった事を思い。

「ねえラピ。あたしがあんた、置き去りにしたのって……」

「うん。東の大陸行きの船だよ。」

一人で東の大陸についたラピは、同じ大陸の港町より北東の村にいた水華を執念で探し出したと言い——それから今まで、二人の小さな旅は続いていた。

「あれから半年って早いね。ジパングのみんなともうそんなに会ってないのかあ……早いのに、長い旅だった気がするね」
にこりと笑うラピは、これまでと何も変わるところはなく。

水華はただ、それを確かめるため同じ問いかけをした。

「何で、そいつらと知り合ったの？」

「——え？ どうしたの、急に??」

ラピからすれば唐突だろう質問に、しかしラピは嬉しげに笑い、
「きつとみんな優しい化け物さんだから、弱つちい人間の私も、
気にしないで面白がってくれてるんじゃないかな。クアン君や
ザイさんが、水華は危なっかしいって助けてくれてたみたい」

「……あんたと一緒にするなっつーの」

不服げな水華と対照的に、幸せそうな穏やかな微笑みのラピは、
ジパングに向かっていている事が、おそらくその顔の理由だった。

しかしすぐにラピの顔は、苦笑いのような微笑みに変わると。
気弱にも聞こえる声でラピは、ねえ……と水華を見た。

「水華は南にいたかったら、無理してついてこなくていいよ？」

おば様達の言い付けで、私を守ってくれてる事は知ってるけど
……ユーオンやクーちゃん達がいれば大丈夫だと思うよ、私」

「別にあたし、あんたのためにジパングに行くわけじゃないし」
それはある目的のため、ジパングに帰るラピの同伴を決めた
水華にとっては全くの本心だったが、

「……らしくないね、水華。私やユーオンの事心配するなんて」
覇気なく笑いつつ、ニセモノと同じ内容を口にするラピだった。

だから水華は、先程までいたニセモノが口にした事も、ほぼ
真実だと悟る……たとえ、ホンモノは口には出来ない事でも。

「水華もクーちゃんも……偉いよね」

「——は？」

船室に戻りながら笑うラピを、水華はただ鬱陶しそうにする。

「二人も私と一緒にで、ホントの血縁はいないのに。私みたいに
拗ねたりひねくれたりしないもんね」

「あんたね。スネオやヒネクレの何が悪いっつーのよ」

水華は生まれつき、反省という思考とは縁を切られていた。
在るがままを認め、使えるものは使い、合わないものは切り。

前だけを見る揺るがなさは、時が止まったようなもので——
「私も二人みたいに……強かったら良かったな」

振り返るしか出来ない、同じく時の止まった相手はただ笑った。

Atlas ver. 2.

—trial addition—

導入短編・了

——は……？と。

海に落ちたカナヅチの少女を、辿り着いた孤島の洞窟に運び、やつと少女が意識を取り戻した時。突如少女に馬乗りになられ、冷たい石床に押し付けられた状況に、水華はきつく目を瞑った。
「……何……あなた、誰？」

水華の両手を足で押さえ、細い首に手をかけた瑠璃色の髪の少女の目に、きらりと殺意が金色に光ったように見え。水華が知る名を口にしたくないと、何故か思わせる輝きだった。

少女は、くすりと——

瑠璃色の髪の少女が抑え続けた……最も深い闇を口にした。

「ねえ、水華……水華なら、助けてくれるよね？」

「……はい？」

「……を助けるために……水華を全部、私にちょうだい？」

その痛みはいつたい、誰のものであるのか——非力な少女が化け物の水華を圧倒し続ける、理不尽な胸の痛みがあった。

「私と……一緒に……」

同じ赤い夢の下に時を止めた少女達の夜は、今もなお続き。

夕闇の中、不思議と明るい洞窟の白い岩肌が少女達を囲み。絞め上げられて視界の翳む水華には、まるで白い夜だった。

「悪いけど……付き合い切れないわ」

それでも水華は……いつか夢の先に進むため、目を開ける。